

〔参 考 文 献〕

上記の注記で掲げたもの以外の主要な参考文献は次の通りである。(順不同)

- ① M. Dobb・京大近代史研究会訳『資本主義発展の研究Ⅰ』・『同Ⅱ』(岩波現代叢書) 1969年。② M. Weber・梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波文庫), 1962年。③ L. Brentano・田中豊次郎訳(部分)『近世資本主義の起源』, 有斐閣, 1941年。④ W. Sombart・梶山力訳『高度資本主義』, 有斐閣, 1940年。⑤ P. M. Sweezy・都留重人訳『資本主義発展の理論』, 新評論, 1967年。⑥ J. A. Schmpeter・中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義(上巻)』・『同(中巻)』・『同(下巻)』, 東洋経済新報社, 1951-’52年。⑦ R. Hilferding・林要訳『金融資本論』, 大月書店, 1982年。V. I. Lenin・波多野真訳『帝国主義論』(創元文庫), 1953年。⑧ P. M. Sweezy, M. Dobb, 高橋幸八郎他・大阪経済法科大学経済研究所訳『封建制から資本主義への移行』, 柘植書房, 1982年。⑨ E. Mandel・飯田裕康, 他訳『後期資本主義Ⅰ』・『同Ⅱ』・『同Ⅲ』, 柘植書房, 1980-81年。重田澄男『資本主義の発見』, お茶の水書房, 1983年。⑩ R. Katzenstein・森啓子訳『国家独占資本主義と再生産』, 新評論, 1971年。⑪ 大内力『国家独占資本主義・破綻の構造』, 御茶の水書房, 1984年。⑫『経済学大辞典Ⅲ・XVI体制・5資本主義体制』, (編集委員代表・中山伊知郎), 東洋経済新報社, 1955年。⑬ 原田三郎編『資本主義と国家』, ミネルヴァ書房, 1975年。

(平成4年8月28日受理)

鹿児島県立短期大学研究者著作物目録

この目録は、本学紀要以外に発表した著書、論文等について1991年1月～12月の期間分をアンケートにより調査し、まとめたものである。掲載順序は著者名のアルファベット順に配列した。

著 書（共著・共訳を含む）

著 者 名	書 名	発 行 所	備 考
橋 口 晋 作	『話題源 古文・漢文』 （「平家物語」のうち「敦盛最後」 「忠度の都落ち」「大原御幸」の 章段）	東京法令出版	共著 5月

論 文（論評・ノート・書評などを含む）

著 者 名	標 題	掲 載 誌 名	備 考
橋 口 晋 作	翻刻 異本二巻本『庄内軍記』上巻	『研究年報』第19号	3月
〃	『薩藩海軍史 下巻』人名索引（稿）監修	『くろしお』vol.16, No.2	3月
〃	「この子」の作品世界について	『解釈』第37巻第5号	5月
〃	源 頼朝の旗揚げをめぐる	『人文』第15号	3月
〃	「芸術家小説としての所謂滞独記念 三部作」	『文学研究』第47号	12月
細 谷 章 夫	「統一後のドイツ——ドイツ事情ある いは印象記——」	『人文』第15号	8月
	カントの第一批判における統制的原理	『西日本哲学会会報』39号	10月
木 戸 裕 子	「大江匡衡・栗田障子十五連作」	『文献探究』27号	3月
田 中 稔次郎	「ランダムイジング模型における 比熱のゆらぎ」	『物性研究』Vol. 56 物性研究刊行会	
倉 元 三七子	「電磁調理器の熱効率」	『物理教育』Vol. 39 日本物理教育学会	
田 中 稔次郎			
西 村 貢	日本企業の多国籍企業化と「東アジア 経済圏」	『研究年報』第20号	3月
〃	「アジア NIES - ASEAN 諸国の経済開発 政策——インドネシアにおける経済開	『商経論叢』第41号	3月

著 者 名	標 題	掲 載 誌 名	備 考
	発政策の展開を中心に——」		
高 橋 洋	外国人の参政権について——EC 委員会 の「命令」提案をめぐって——	『商経論叢』第40号	3 月
山 本 秀 行	「薔薇 ^{ローズ} という名前, 薔薇のイメージ—— T. Williams, <i>The Rose Tattoo</i> における Rose/rose imagery 解釈——」	『人文』第15号	8 月

してお礼申し上げる。

- (16) 原田豊吉「日本地質構造論」(農商務省地質局編刊『明治二十一年十二月/地質要報』第四号)三三一頁(なお、この頁数は一八八八年刊『地質要報』第一号からの通し頁である)。

(17) 同右、三三四頁。

(18) 山上万次郎・浜田俊三郎『新撰日本地理』(一八九三年四月)一六七〜一六八頁。

(19) 矢津昌永『地理学小品』(一九〇二年七月、民友社)一四六〜一四七頁。

(20) 志賀重昂は、一八九四年一〇月刊行の名著『日本風景論』で知られるが、在野精神旺盛でユニークな地理学者であった。彼は札幌農学校で学び、三宅雪嶺の政教社に参加、国粹保存主義のジャーナリストとして活躍し、日清戦後の九五一年一〇〜一二月『新潟新聞』主筆を勤め、九六年三月進歩党幹事、九七年八〜十一月「松隈内閣」の農商務省山林局長に就任し、その後も衆議院議員を二期勤めるなど、政治家としても活躍した人物である。その一方で、彼は九五年九月以降長く東京専門学校(↓早稲田大学)で地理学を教授し、教科書ないし講義録の類を多く出版している。

(21) 志賀重昂『地理学講義』(第五版、一八九二年九月、敬業社)九五〜九八頁。

(22) 志賀重昂の地理書について書誌的検討をおこなった源昌久氏は、一九〇四年度早稲田大学講義録である『地理学』や、〇四年一月訂正再版『地理教科書本邦篇』を志賀が「裏日本」「表日本」の語を用いた最初としているが(源昌久「志賀重昂の地理学―書誌学的調査―」(『Library and Information Science』No.13、一九七五年一〇月、二〇一頁)、私の調査では前年の一九〇三年段階で使用しはじめている。

(23) 塚越芳太郎(号停春)はほとんど知られていないジャーナリストであるが、この頃、民友社から「教育叢書」を刊行しており、『地理と人事』はその第四巻である。ちなみに他の巻は、第一巻「家庭夜話」、第二巻「齊家小訓」、第三「国民と時勢」、第五巻「風土と人情」、第六巻「事務的教育」となっている(第五、六巻は予定)(『国民新聞』一九〇一年九月一日の広告)。

(24) 塚越芳太郎『地理と人事』(一九〇一年九月、民友社)四頁。

(25) 同右、一二頁。

(26) 同右、一八頁。

(27) 同右、二六〜二七頁。

(28) 同右、三〇頁。

(29) 同右、二二〇頁。

(30) 同右、二二一頁。

(31) 新潟県議会議事事務局蔵『明治三十三年度新潟県通常県会議事速記録』一〇〇四〜八頁。

(32) 上村左川『新日本地理問答』(一九〇二年一月、博文館)二九頁。

(33) 佐藤伝蔵『中本邦地理教科書』(一九〇一年一月、六盟館)五、一〇頁。

(34) 松波仁一郎「日本海に対する邦人の活動」(『東北評論』第八号、一九〇六年三月一日)。なお松波は、当時、東京帝国大学法科大学教授で日本海法学会理事長・内閣法律顧問を勤める海法学の権威であった。

(平成四年七月七日受理)

は隠蔽化された、ということである。

中等教育用の日本地理教科書を主な検討対象としてきたのであるが、「裏日本」の語が一般に用いられるようになったとき、地域格差観念としての「裏日本」が隠蔽化されたというのは皮肉なことと言わなければならない。だが、新聞・雑誌などを通じて、地域格差観念としての「裏日本」観念は一九〇〇年頃から人びとの脳裏を捉えていったのである。ゆえに私は、地域格差観念としての「裏日本」観念の成立時期を一九〇〇年頃と把握したい。

一九〇〇年という年は様々な意味で記憶される。清国における義和団事件に際し日本が帝国主義列強の「極東の憲兵」としてその鎮圧の先頭に立つことを通じ帝国主義国へ転化したといえる年であり、政党と藩閥官僚勢力の一翼が合体して立憲政友会が結成され、新しい政治体制が始動した年であり、産業革命により日本資本主義が確立した頃の年であった。そうした近代日本の大きな節目―それは日本の「国家的発展の節目」といえる―に際し、太平洋側を「表日本」、日本海側を「裏日本」としてみる地域格差観念が一般的に成立したのである。

（注）

- (1) 千葉卓爾「いわゆる『裏日本』の形成について―歴史地理的試論―」（日本歴史地理学会編『産業革命期前後の歴史地理―歴史地理学紀要6―』一九六四年十二月、古今書院、一六五頁）。
- (2) 山崎直方・佐渡伝蔵『大日本地誌』第五卷（一九〇六年九月、博文館）一頁。
- (3) 前掲、千葉論文、一六六―一六九頁。
- (4) 山口恵一郎「裏日本」（日本地誌研究所編『地理学辞典（改訂版）』一九八九年四月、二宮書店、三三―三四頁）。
- (5) 「『裏日本』の形成についての再考―成立期を中心に―」（『新潟県史研究』第一四号、一四頁、一九六三年一〇月）
- (6) 源昌久「矢津昌永の地理学―書誌学的調査―」（『淑徳大学研究紀要』第一二号、一九七八年二月、七四頁）。なお、矢津昌永（一八六二―一九二二）は肥後熊本出身で、県立熊本師範学校を卒業後、中学校師範学校教員免許規定に基づく検定試験に合格し、福井県尋常師範学校・第五高等学校などで教えた後、東京の高等師範学校研究科で学び、一九〇〇年から一九〇九年まで高等師範学校教授、〇四年以降は陸軍教授を兼任し、一八九九年から一九二〇年まで東京専門学校（↓早稲田大学）の講師も勤めている。源昌久氏は矢津昌永をノン・アカデミーの地理学者と位置づけている。
- (7) 矢津昌永『中日本地誌』（一八九五年三月、丸善）一五頁。
- (8) 同右、二三頁。
- (9) 同右、一七〇―一七一頁。
- (10) 同右、一八〇、一八二頁。
- (11) 佐藤伝蔵『日本新地理』（一八九八年三月、博文館）一〇八頁。
- (12) 中村五六編・頓野広太郎補『中等中地理』（一八九六年一〇月、文学社）五七頁。
- (13) 同右、同頁。
- (14) 松島剛『近世日本地理学（日本之部）』（一八九一年九月、春陽堂）一、六頁。
- (15) 農商務省地質局編刊『明治二十一年十二月／地質要報』第四号の閲覧に際しては、通商産業省工業技術院の地質調査所の地質相談所の吉井守正氏にお世話になった。記

雪殊に多し」と記されていて、これまた自然地理上の説明しかしていない。このように、ほとんどの地理書は「裏日本」の語は自然地理上——とくに地勢論上の概念たるに留まっているのである。

こうしたなかで例外的に人文地理上の地域格差観念として「裏日本」「表日本」の語を用いているのは、前出の矢津昌永や志賀重昂であった。しかし志賀の教科書は数多くある地理教科書のなかでは異例のものであった。矢津の『地理学小品』も正規の教科書ではない。現在の時点で私の目に接したもっとも古い地域格差観念としての「裏日本」の用例はさきに紹介した塚越芳太郎の『地理と人事』に収録されている「気象的影響（邦人の性格に対して）」（『人民』一八九九年二月）であるが、もちろん、これは教科書でない。

なぜ教科書類は地域格差観念としての「裏日本」を記さないのだろうか。私はつぎのように考える。「裏日本」という語が人文地理上の地域格差観念を内包するものであるとすれば、それが一般に普及した段階においても、教科書上の取り扱いが慎重になり、地域格差観念の側面を意識的に除こうとする力が働くこともありうるだろうと。

これについては一九〇一年一月刊の佐藤伝蔵著『中本邦地理教科書』が示唆的である。本書は「前編 総論」「第一章 天然地理」のなか

の「沿岸」の項で「本州の太平洋に面する部分は、海岸線最も多く屈曲し、従て港湾に富むも、日本海に面する海岸線は二三の岬湾を除くの外、殆ど屈曲出入なしと云ふも差支なき位なり。されば太平洋に面する部は交通運輸の便及人文の発達等、遙かに日本海浜地方に優るものあり」と記し、地域格差を指摘している。ただし、ここではあえて「太平洋に面する部分」「日本海に面する海岸線」と表現していて、「表日本」「裏日本」の語を用いていない。ところが、少し後に出てくる同章の「山系」の項では「表日本」「裏日本」の語を用いている。^{③④}

佐藤の場合、人文地理上の地域格差に触れるときは「表日本」「裏日本」

本」をわざと用いず、単なる地勢論の個所でだけそれを用いているのである。

こうした事情が、冒頭にみた山崎直方・佐藤伝蔵著『大日本地誌』第五巻を引いた千葉徳爾氏の所説のように、「裏日本」「表日本」の用例から地域格差観念性を除去せしめていると考えられる。ところが実際には、すでに教科書類以外で地域格差観念としての「裏日本」が普及拡大し、ひとびとの脳裏にしっかりと植え付けられていたのである。その例として、山崎直方・佐藤伝蔵著『大日本地誌』第五巻が刊行される少し前に松波仁一郎が著した文章の一節を紹介しよう。

従来久しく裏日本と称せられ太平洋沿岸の諸地に比すれば進歩の程度殆ど同日の談にあらざるなり。農業は尚幼稚なるを免れず、工業に至ては福井石川に於ける一の羽二重業を外にして見るべきものを求むべからず。漁業尚開けず航海は表日本の航路縦横錯綜するの比にあらず。従て官設の事業も亦表日本を主として裏日本に及ばず。金沢に一ケの師団設けられありと雖も実業学校の高等なるものなく、特に鉄道交通は最も不完備にして、換言すれば日本海に面する地方は全国中にて殆ど継見扱せられつ、あるが如し。^{③④}

おわりに

以上をまとめると、①「裏日本」という語が自然地理―地勢上の概念として一八九五年から登場し、②一九〇〇年頃から人文地理上の概念として―地域格差を意味するものとして用いられるようになった、③その背景として、その頃に日本海側と太平洋側の経済的社会的発展の格差の顕在化があった、④教科書類では一九〇二年頃から「裏日本」の語を用いるものが多くなったが、それは自然地理―地勢上の概念として用いられる場合がほとんどで、地域格差観念としての「裏日本」

を現していたことが知られる。

「裏日本」「表日本」の語を使つてはいないが、両者の格差がこの頃顕在化していたことはつぎの例からも知られる。すなわち、同年一月の新潟県通常県会で採択された「直江津富山間鉄道工事期繰上ノ儀ニ付建議」は、「我邦交通機関ノ……発達タルヤ概ネ太平洋岸ニ偏シ日本海岸ニ於テハ何等ノ施設ヲ見ルナカリシハ国家経営上ノ一大欠点ト云ハサルヘカラス」といい、つづく「新潟秋田間ノ鉄道線を官設第一期線中ニ編入セラレンコトヲ請フ建議」も、「我国交通機関配置ノ現状ヲ觀ルニ其至鋭ノ利器タル鉄道ハ太平洋岸一帯ノ地ニノミ発達シ日本海岸ノ全線ハ悉ク此必要ヨリ遺忘セラレ……」と述べている。

このように、一九〇〇年頃には太平洋側に対する日本海側の立ち遅れという地域格差が一般的に意識されるようになっていた。そして「裏日本」の語の地域格差觀念化が見られるようになったのである。日本海側と太平洋側の懸隔が大きくなり、明瞭になってくるなかで、發展する太平洋側を「表日本」、衰退する日本海側を「裏日本」と称えることが状況をよく表現するものと広く認識されるようになったからであらう。前出の山上・浜田著『新撰日本地理』における「裏面」「表面」の語の用例がこのことを示唆している。それまた一九〇二年頃から日本地理の教科書類で「裏日本」の語を用いるのが多くなった理由であらう。

四 教科書における地域格差觀念としての「裏日本」の隠蔽化

前掲表は一九〇三年の分までしか掲げていないが、その後一九〇六年にかけての地理書および紀行文などで「裏日本」の語を用いたものは、私が確認しているだけでつぎのようなものがある（ただし、これ

らは前表のような当該期の地理書を広く検索しての結果ではないので、実際にはもっと多くあらう）。

志賀重昂著『地理学教科書（本邦篇）』（○五年一月、訂正再版、富山房）

矢津昌永著『日本地理』（○五年度講義録、早稲田大学出版部）

山上万次郎著『最新統合帝国地理』（○五年十二月、大日本図書）

中村士徳・大久保千涛著『本邦地理詳説』（○六年六月、博文館）

塚原金太郎著『ふところ硯』（○六年六月、佐久間書房）

郁文舎編輯所編『日本地理辞典』（○六年八月、郁文舎・宝文館）

山崎直方・佐藤伝蔵著『大日本地誌』第五卷（北陸）（○六年九月、博文館）

月、博文館）

志賀重昂著『日本地理講義（中学一年）』（○六年度講義録、早稲

田大学出版部）

ここで一つ問題となるのは、いま挙げた地理書も含め、「裏日本」の語が一般に使われるようになった段階でも、地理の教科書のほとんどがそれを自然地理―地勢上の概念として用い、説明し終わるのが通例であったという事実である。

例えば、一九〇二年一月刊の上村左川著『新撰日本地理問答』は、「九

表日本裏日本とは何に因て起る呼称なるか」と設問し、「両山系に就

き日本を両部に分ち、太平洋に面する方を表日本（又は外帯）と名け、

日本海に面する方を裏日本（又は内帯）と名く、前者に在る両山系は

火山概して少く地層も整然たれども、後者に在る両山系は火山に富み

地層錯雑なり」と解答させている。そもそもこれは「日本自然地理」の

部における設問の一つであった。また○六年八月刊の郁文舎編輯所編

『日本地理辞典』の「裏日本」の項は、「日本海に面せる部分にして、

海岸線は凹凸少なく、従て良港に乏し、潮汐昇降の差甚だ少く、土地の陥没して海となれる所多く、大山多きを以て地層錯雑す、冬季は雨

彼が「表日本と裏日本」を節タイトルに出し、「裏日本」の語を用いるのは、前表のごとく一九〇三年四月刊の『中等地理（日本之部）』からであった。²² 少なくとも志賀においては、この段階で自然地理上の概念としての「裏日本」と人文地理上の地域格差観念としてのそれを統一させたといえる。そして志賀も使いはじめた、というよりも、使わざるをえなくなったところに、地域格差観念としての「裏日本」の語の一般的成立がうかがえるのである。

ここに塚越芳太郎著²³『地理と人事』というポケット版、全二七七頁の書物がある（一九〇一年九月、民友社刊）。これは題名通り、「地理と人事の如何に深く相渉るべき乎は知るべき也」（巻首に題す）という観点から二五編の論文を収録したものである。古くは一八九二年の著作も入っているが、大部分は九九年から一九〇〇年にかけて書かれたもので、調べたところ、ほとんどは新聞『人民』の社説欄「人民」に掲載されたものであることが分かった。この二五編のなかで「裏日本」「表日本」の語を用いたのが二編ある。一は巻頭の「氣象的影響（邦人の性格に対して）」という論文、一はその名もずばり「表日本の繁昌」である。

前者は『人民』一八九九年一月二日から一二日にかけて七回連載され、本書中ではもつとも長文のもので、日本の特性たる多くの「氣象的差異が、如何なる形式を以て邦人性格の差等を顕はしつゝ、ある乎。又邦人は此の性格に対して、如何に自ら努め、如何に自ら顧みるの要あるべき乎」という問題関心から執筆し、つぎのように述べている。

若し晴天にして人を快活ならしめ、曇天にして人を沈鬱ならしむべき傾きある乎、表日本人の快活にして裏日本の沈鬱ならんとするは自ら故なきに非るを知る。²⁴

南日本及び表日本の大部分によりて海洋的日本を形づくり。北日本及び裏日本の大部分により大陸的日本を形づく。²⁵

「裏日本」観念の成立（阿部）

是迄日本の政權を掌握したるものが、概して所謂海陸中間的日本人に非れば則ち海洋的日本人にして、大陸的日本人の未だ天下を取りたることなきが如き、其地理上の便不便に關したる勿論なると共に、亦其氣象的影響に基きたる所少なからざる也。氣象の障害は言ふ迄もなく其性格上の影響たる粘液的氣稟の如きも、進で邦家を經營するに恰當せざる所少なからざれば也。²⁷

著者は結論として、両者はその長所短所を自覺し、足らざるを補うべしと主張するのであるが、日本海側人民の沈鬱性、粘液性（「沈鈍なる粘液性」）²⁸をあげ、ゆえに「邦家を經營する」は政權につくことができなかったというのは、日本人としての劣等生を指摘していると受けとめられてもしかたない。

後者の「表日本の繁昌」は『人民』一九〇〇年四月一二日に掲載された小文である。一八九三年と五年後の九八年の府県別現住人口を比較し、「人口増加の大なるは表日本たる太平洋沿岸及び其西南面の地方」であり、「之に反して人口増加の最も少なきは日本海岸の北陸、山陰地方」といい、「我が國民的波動の向ふ所」が、北海道を別にして、「概して太平洋岸殊に其南西岸に向て流注しつゝ、あるもの、如く、其局部に於ては、一般に郡村より都市に向て流注しつゝ、あるもの、如し」と述べている。なお、この著作には「國民的波動、上」の副題があり、それは「都市の膨大（國民的波動、中）」「都市本位の時代（國民的波動、下）」と続く。

以上、塚越の二本の論文を紹介してきたが、これは現在までに私の目に止まったもつとも古い地域格差観念としての「裏日本」「表日本」の用例である。地理教科書上の登場——といっても、後述のように、志賀重昂の書などごく限られたものしかないが——はこの塚原の著書の後であり、新聞界のほうが先に使用していたといえる。そして本書により、一九〇〇年前後に「裏日本」「表日本」の格差がはっきりした形

は裏日本に比すれば少々高く、生活の程度は裏日本は表日本よりも頗る劣れり、是を以て人口も常に裏日本より表日本に流入するの傾向を有し、人民住居の有様は著しく表日本に稠密にして裏日本に稀疎なり、……従つて人事上の繁榮は常に表日本に行われたり¹⁹⁾

この一節において、「表日本」「裏日本」の語自体は自然地理上の概念として用いられていることは明白で、それを「太平洋側の日本」「日本海側の日本」に置き替えることも可能であろう。だが両者を對比して「裏日本」の「表日本」に対する格差を記述し、「自然的諸事情の差異は更に人事的發達の上に影響し、表裏日本をして種々の懸隔を見るに至らしめたり」と述べるとき、「裏日本」の語は自ずと地域格差觀念に転化してしまう。

こうして「裏日本」「表日本」の語は人文地理的な地域格差としての意味が付加されるようになった。これを「裏日本」の第二の意味内容（第二義）として把握したい。

つぎに、それが一般化した時期をどうみるかについて、志賀重昂・塚原芳太郎の著作を通して考察しよう。

志賀重昂²⁰⁾の地理教科書は一八八九（明治二二）年八月、敬業社から刊行した『地理学講義』が最初である。これは八八頁の短いものであったが、その後、増補しつつ版を重ねていった。九二年九月の第五版（全一二〇頁）では、第一章「比較的考察」において「欧羅巴洲」と「亜細亞洲」、「日本海岸」と「太平洋岸」の各比較が行われる。初版にはなかった「日本海岸」と「太平洋岸」の比較は全部で二〇項目あり、その第一六・二〇は人文地理上の比較となっている。砂糖・煙草・藍の類の産出を比較した第一六項は省略し、以下について、どんなことを言っているか紹介しよう²¹⁾。

（十七）日本海岸は在来交通の便甚だ少し。

（十八）日本海岸は太平洋岸よりも人口少し。

（十九）日本海岸にては未だ日本歴史中の重要な事件を演出せしことなし。

（二十）日本海岸は未だ發達進暢せず、今日より發達進暢せんとするもの。

（十七）太平洋岸は交通の便甚だ多し。

（十八）太平洋岸は日本海岸よりも人口多し。

（十九）太平洋岸にては在来日本歴史中の重要な事件を演出し、王霸歴代の興亡多くは此所に決せり。

（二十）太平洋岸は甚だ發達進暢し、日本の文化は多く此所に聚りたるもの。

この記述は九四年六月の第六版（全一五〇頁。ここから出版元が政教社に変わる）にも引き継がれ、同年一〇月刊行の有名な『日本風景論』にも、さらに以降の志賀の地理書のほとんどに引き継がれていく（なお『日本風景論』以後は第二一項が追加される）。

このように、志賀はかなり早い時期から自然地理が人文地理に及ぼす影響を強調し、実質、太平洋側と日本海側の格差を指摘していた。そもそも志賀の地理書は、地勢・天候・人口・特産などの事実を羅列する一般の地理書のあり方に強く異を唱え、南・北日本の差異と政權の興亡、傑出した人物の特徴、政治風土の違いなど政治地理を中心に地理学を総括する点に特徴がある。だから日本海岸と太平洋岸の人文地理の比較考究が志賀の地理学で大きな比重を占めるのは当然であった。

志賀は早くから格差を指摘していたが、長い間「裏日本」「表日本」あるいは「裏面」「表面」の語を用いなかった。理由は不詳である。

本地理」の第二章「地方誌」の五番目の項「北陸道誌」のなかで用いた例外的な地理書であった。その「北陸道誌」は新潟港に関し、つぎのように述べている。

新潟ハ信濃川の河口にあり、越后一円及び佐渡を管轄する新潟県庁の所在地にして、人口四万七千余、五港の一なり。然れども信濃川の泥砂年々沈積すること夥しく、河口遠浅にして、船舶の碇泊に不便なり。郵便会社の汽船ハ殆ど一哩外に船を止め、小汽船を以て荷物を運搬すと云ふ。故に碇泊中と雖とも、風波起るときは、難を佐渡の夷港に避けざるべからず、従て冬日波暴きにハ、船舶の寄港するもの少なし。

外国貿易ハ実には微々たるものにして、明治廿四年に於ける輸出入額ハ僅かに二万六千余円なり、是れ畢竟我邦の裏面に位置するを以てなり、然りと雖も西比利亞鉄道成功の暁にハ、現今我國の裏面なる日本海面ハ表面と変じ、恰も英國の欧州大陸に於けると等しき關係となり、新潟港の、繁盛に趣くやも知る可からず¹⁸⁾。

要約すると、五開港場の一でありながら、新潟は信濃川の河口港で土砂の堆積が著しいため水深が浅く、そのため汽船が碇泊できず、貿易高も僅かにとどまっているが、それは結局、日本の「裏面」にあるからである。ただし、シベリア鉄道の開通を機に大陸貿易が始まれば、新潟は「表面」に転じるかも知れないという、ことになろう。これは明らかに新潟港の衰退という人文地理上の事柄の原因が自然地理―地勢上の「裏面」にあることに求めている。とくに文中の「現今我國の裏面なる日本海面ハ表面と変じ」というくだりにおける「裏面」の意味は自然地理の範囲外にある。自然地理上の「裏面」は「表面」に転じようがない。それをあえて「表面と変じ」というのは、もはや「裏面」「表面」の語を経済的・政治的・社会的発展の度合を斟酌した人文地理上の概念として用いていると考えざるをえない。

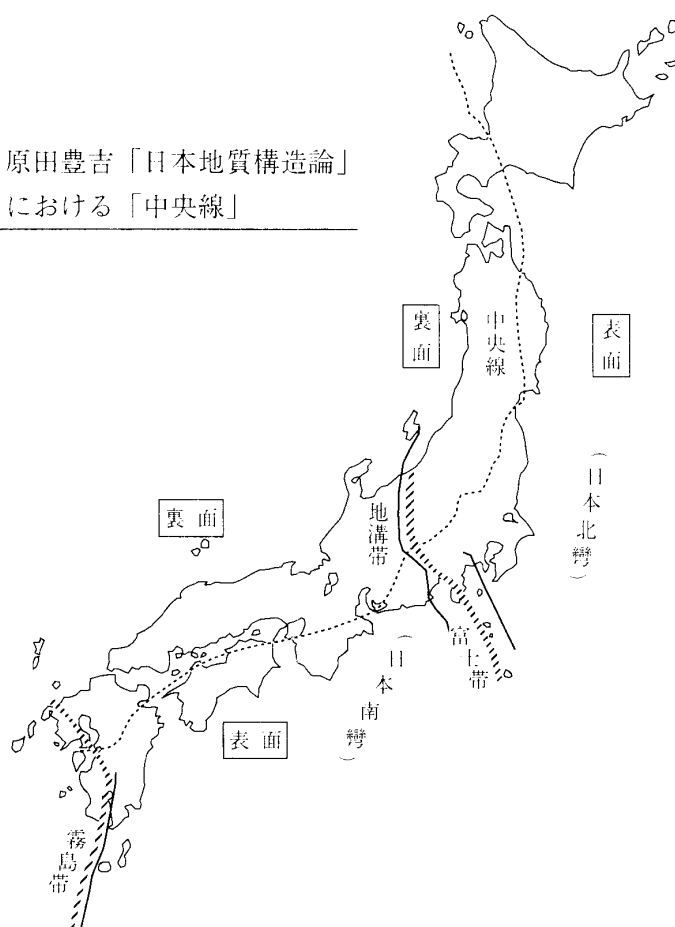
太平洋側に対する日本海側の立ち遅れについての認識があったことが、「内帯」や「内面」でなく「裏面」という語を用いさせたのはあるまいか。当時の日本の経済発展が欧米との貿易によってもたらされていたことは事実であり、その拠点貿易港である横浜港をようする太平洋側の発展に対して、日本海側唯一の貿易港たる新潟港の有様は萎靡不振の状甚だしく、この際立つ対照が「裏面」の語を用いさせたと推察される。「裏面」の語が新潟港を語ったところで用いられているのも、こうした事情からであろう。

とはいえ一八九〇年代では、山上・浜田著『新撰日本地理』の「裏面」「表面」の用法は例外的であり、「裏面」「表面」あるいは「裏日本」「表日本」の語は自然地理―地勢上の概念として用いられる状況が続いていた。だが一九〇〇年代になるとかなり明瞭に地域格差を意識した用法が現われる。

その代表的なものは、すでに一八九五年から「裏日本」の語を用いていた矢津昌永の一九〇二年七月刊行の『地理学小品』という書物である。本書は全二三項目からなるが、その一項目として「表日本及裏日本」が設けられ、かなり詳しく論じられている。まず「表日本」「裏日本」とは「自然的区画にして、風土的名称」であり、「天然の及人事的に於て、特種の性格を供ふる」ものであると定義し、ついで地勢・地形・氣候について述べたのち「其発達」「其人物」について論及し、つぎのようにいう。

前述数項の自然的諸事情の差異は更に人事的発達の上に影響し、表裏日本をして種々の懸隔を見るに至らしめたり、先づ社会発達に要する財源に就て之を觀れば、著しく表日本の裏日本に優るを見るならん、其農産物に於て、其工芸品に於て、其水産に於ては皆裏日本の表日本に及ばざる所なり、只鉱産に於ては裏日本の地質錯雜なるを以て、表日本に優る所あり、故に富の程度も表日本

原田豊吉「日本地質構造論」
における「中央線」



（支那）山系Ⅱ日本南彎がぶつかり接合している「富士帯」を境に日本群島を「北日本」「南日本」に区分することが広く行われており、ここから「中央線」で画され地勢・気候・風土・文化など大差ある「裏面」「表面」を、「北日本」「南日本」とおなじように「裏日本」「表面」と呼称しはじめたのではないかと推察する。なお「裏面」が「裏日本」に変わるとき、地勢学上は「裏面」に入る山陽地方・北九州地方を「裏日本」から除外しており、「裏面」と「裏日本」の間には断絶面もある。

以上をまとめると、「裏日本」「表日本」の語は、自然地理の一つである地勢論のなかの地質構造論に関し、一八九一年まず「裏面」「表面」として用いられはじめ、それがさらに矢津昌永により九五年「裏日本」「表日本」と称されるようになったと考えられる。

三 「裏日本」の格差観念化

「裏日本」という語が自然地理―地勢上の概念として用いられる限り、それはまだ経済的・政治的・社会的な地域格差観念を含まないともみることができる。たしかに、最初に紹介した矢津昌永著『中日本地誌』のように、自然地理に関して「裏日本」「表日本」ないし「裏面」「表面」の語を用いた地理書の多くは各道誌（地方誌）―とくに北陸道誌においては、冬季の交通の不便さを指摘することはあるものの、米産や特産品を示しつつ、将来の産業発展を展望させる記述がほとんどである。

だが、そこにまったく地域格差観念がなかったといえ、もはや一八九〇年代半ばには芽生えがあったのではないかと思わせるものがないわけではない。その例として九三年四月刊の山上万次郎・浜田俊三郎著『新撰日本地理』をみよう。これは「裏面」「表面」を第二編「日

書」（および九九年三月刊の同三訂版）にもみられるが、うち野口の地理書が前掲『地質要報』を参考文献の一として序文で明記している。こうしたことから、中等教育用教科書に「裏面」「表面」の語が登場する背景には原田「日本地質構造論」の影響が推測されるのである。これで「裏面」「表面」の語が登場する経緯は明らかとなった。ただし、おそらく翻訳の問題として、なぜ Inner side を「内面」「内側」でなく「裏面」としたのか、Outer side を「外面」「外側」でなく「表面」としたのか、という問題は残る。この点は暫くおくことにしたい。

矢津昌永はこの「裏面」「表面」をヒントに「裏日本」「表日本」を造語したのであろう。ただし、なぜこのような造語をしたかは、遺族の証言からはわからない。私は、当時、樺太山系Ⅱ日本北彎と崑崙

「裏日本」「表日本」の語が自然地理の一つの地勢上に使われたものであることは、この語源が「地文学」にあることを示唆する。その「地文学」では、地質構造を示すに際し太平洋側を「外帯」、日本海側を「内帯」と称することが多かったが（これは前掲、日本地誌研究所編『地理学辞典（改訂版）』でも立項されている）、それを「内面」「外面」と称したり、「裏面」「表面」と称することもあったのである。この「裏面」「表面」の語が「裏日本」「表日本」の語源であらう。

当時日本で刊行された「地文学」の書は、アーキバルト・ゲーキの大部な訳書をはじめ、地球規模を対象としたものであり、「日本地文学」は未成立の状況であった。そうしたなか、日本の「地文」は農商務省地質局などで調査研究が進められていた。その調査報告書の一つである地質局編刊『明治二十一年十二月／地質要報』第四号に同局

ところで、松島剛著『近世日本地理学（日本之部）』の後、「裏面」「表面」の語は、九三年四月刊の山上万次郎・浜田俊三郎著「新撰日本地理」（および同年六月刊の同再版）、九六年二月刊の野口保興著『中等教育地理教科書（本邦之部）』（一九〇〇年一二月刊の同著『中等教育国大地誌』も同文）、九八年二月刊の三省堂書店編『改訂帝国地理教科

にいう。

我日本全体ノ地形ハ西北ナル日本海ヲ抱テ弓形ニ彎曲シ南東ナル太平洋ニ向テ突出セリ故ニ又日本海ニ浜スル方ヲ内面或ハ裏日本ト云ヒ太平洋ニ面スル方ヲ外面或ハ表日本ト云フ表日本ハ地体ノ表面ニ属シ多ク水成岩ヲ以テ組織シ裏日本ハ交錯セル地層ヨリ成リ著シク火山ニ富メリ是レ内外ニ於テ相異ナル所ナリ^⑧

これは外面Ⅱ表面Ⅱ表日本、内面Ⅱ裏面Ⅱ裏日本という意味であり、「北陸道誌」の章の「海岸」の項目においても「北陸道ハ長ク日本海ニ浜シ総テ我国地体ノ裏面ニ属シ裏日本ノ彎曲部ニ当ルヲ以テ陥落ノ遺跡少ナカラズ……」と記されている。^⑨

他方、「北陸道誌」の章の末にある「生業産物」の項目では、「土地頗ル肥沃ナルヲ以テ各地共農行ハレ農産物尠ナカラズ」「米ノ産額ハ二百七八十萬石ニシテ一県下ニシテ産額ノ多キハ即チ新潟県ヲ最トス是ヲ以テ富ノ度モ甚タ高シ」「工業ハ古ヨリ頗ル発達シ越後縮、越前奉書紬、越中薬剂ノ如キ其名既ニ高シ近來越前ノ機業ハ非常ニ進歩シ産額四百萬円ニ達シ重モニ海外輸出ノ手巾トス」^⑩などと記されている。

以上の記述からは、北陸地方が地勢的に「裏日本」であることが理解されても、この地域が遅れたところであるとは認識されまい。このように、「裏日本」の語が登場した当初は、自然地理の一つである地勢上から用いられているのである。

一八九八年三月刊の佐藤伝蔵著『日本新地理』、同年四月刊の角田政治編・矢津昌永監修の『新編中学地理（日本誌）』における「裏日本」の語の用法、意味内容も矢津の前書と同様である。ちなみに、佐藤著『日本新地理』は第二編「日本地文地理」の「地勢」の項で、「……因テ太平洋ニ面スル方ヲ表日本（外帯）ト名ツケ、日本海ニ面スル方ヲ裏日本（内帯）と名ツク」^⑪と記している。

一九〇二年以降において「裏日本」の語を用いた多くの地理書においても、まず自然地理上の地勢論に關した個所でそれに触れるのが通例であり、そうした意味での「裏日本」の語が次第に使われ始め、やがて一般化していくのである。これを「裏日本」の第一の意味内容（第一義）として把握しておこう。

なお、このような一般的用例のなかにあつて例外に属するのは、九年一〇月刊の中村五六編・頼野広太郎補『中等中地理（日本誌）』である。本書で「裏日本」の語が用いられているのは、第二篇「日本誌」のうち「総論」のなかの「氣候」の項においてであり、「地勢」の項ではない。例えば「裏日本冬期ノ天氣ハ、毎ニ陰鬱ニシテ」「表日本ハ、冬期概ネ快晴ナリ」^⑫などと使われている。だが、それもその直前に「本邦ノ主山脈ハ、南西ヨリ北東ニ走りテ、本邦ヲ表裏（北、西ニ面スル方ヲ裏面ト称ヘ、南、東ニ面スル方ヲ表面ト云称フ）両面ニ分ツヲ以テ、表裏日本ニ於ケル降水量ハ、夏冬両期ノ間ニ大差アルナリ」^⑬と地勢上の説明が補足的に行われており、本書も「裏日本」の語を地勢上の概念として用いていることは他の事例と同じである。

ところで、さきに佐藤伝蔵著『日本新地理』において「日本地文地理」という概念が出てきたが、当時の中等教育用の日本地理の教科書が一般にどのように構成されていたかについて、ここで簡単にふれておこう。当時の教科書は、著者によって構成の仕方がかなり異なるのであるが、最大公約数的にいえば、大きく「自然地理」「人文地理」「各道誌（地方誌・処誌）」で構成されているといつてよい。量的には「各道誌」が全体の三分の二前後を占めるものが多いが、配列は、まず日本全体に關する「自然地理」、ついで「各道誌」、最後に日本全体に關する「人文地理」の順が多い。最後の「人文地理」は総括的位置を占めている。また「各道誌」のなかは府県別に記述されるのが普通で、その記述内容は各道ないし府県単位の「自然地理」「人文地

の『新編中学地理（日本誌）』、九九年三月刊の矢津昌永著『中地理学（日本誌）』、一九〇二年一月刊の佐藤伝蔵著『^中本邦地理教科書』が「裏日本」の語を用いている。一八九五年から約六年の間にこれだけの地理書が「裏日本」の語を用いていることは注目されねばならない事実である。と同時に、この間はまだ「裏日本」の語を使用しない地理書が圧倒的に多いことにも注意する必要がある。

もう一つの顕著な傾向は、一九〇二年頃から「裏日本」の語を用いる地理書が多くなったことである。とくに注目すべきは、少し前の〇一年一月刊の普通学研究会編『^新帝国地理問答』、〇二年一月刊の上村左川著『日本地理問答』、〇三年九月刊の育文館編輯所編『日本地理問答』といった高等学校・高等師範学校等への受験参考書類にも登場していること、また従来用いなかった山上万次郎・志賀重昂・松島剛・池田鹿之助らの書が用い出していることである。そして表には掲げてないが、日露戦争の開始年である一九〇四年以降はより多くの地理書が「裏日本」の語を使用するに至るのである。ちなみに、先に紹介した二つの文章（長風万里「裏日本と海運の六傑」、矢津昌永「雪之日本」）が雑誌に掲載されたもの一九〇三年四月、一九〇四年一月であった。したがって、一九〇一―〇二年の段階で「裏日本」の語が一般化したと見るべきであろう。

ところで、矢津昌永の地理学に関する詳細な書誌的調査報告をしている源昌久氏は、一九〇二年七月刊の『地理学小品』に關し『書誌的注解』を施した個所で、矢津が本書で「表日本及裏日本」を「明確に定義し使用している」と指摘した後、「矢津の遺族（大川英子氏）の談話によると、『表日本』『裏日本』の用語は矢津が始めて造語したとの事である」と記している。^⑥『地理学小品』は「表日本及裏日本」の一項を設け、かなり詳しく論じており、注目すべき文献であることは確かで、私のちに取り上げるが、それが「表日本」「裏日本」の

初出でないことはすでに示したところである。とはいえ、前掲表で初出の地位にある九五年三月刊行『^中日本地誌』の著者が矢津昌永であることと「矢津の遺族（大川英子氏）の談話」は符合する。このことから私も矢津昌永が「表日本」「裏日本」の造語者と認めてよいと思う。ただし、後述のように、その語源というべきものが以前にあったのであるが。

二 自然地理上の概念としての「裏日本」

一八九五（明治二八）年に「裏日本」という語が登場したとき、それはどのような意味内容をもつものであったろうか。そこにはすでに社会的な地域格差が意味されていたであろうか。このことは冒頭でみた千葉卓爾氏の所説とも関連して明確にすべき問題である。また「裏日本」の語はそもそも何に由来するものであるか、ということもあわせて明らかにすべき問題である。

そこで、まず一八九五年三月刊の矢津昌永著『^中日本地誌』をみてみよう。全二七七頁からなる本書は、大きく「総論」「日本地誌」、ついで「畿内誌」以下の各「道誌」の章で構成されている。このうち「日本地誌」の章は「我日本カ世界ノ何レノ部分ニ位シ又如何ナル国柄ナルヤヲ知」^⑦ることを目標に書かれ、「位置」「形勢」「幅員」「区画」「人口」「地形」「地体構造」「火山」「湖沼」「海岸線」「良港」「風景」「地震」などの項目からなるが、「裏日本」の語が最初に登場するのは、このうちの「地体構造」の項目においてである。ここで矢津は、日本は樺太山系・支那山系の二つを「地殻（土地の骨組）」としてなる隆起帯で、この二山系が接合するところに「地溝」―富士帯があるが、この富士帯を境に、樺太山系に属する土地を北日本、支那山系に属する土地を南日本と称する、と述べたうえで、次のよう

刊行年月	書名	編著者	発売元	裏	備考
1902. 1	最近地理学教科書（日本之部）	山 上 万次郎	大 日 本 図 書	○	全2冊の内、第四版＝02.12
02. 2	中等 教育 日 本 地 理 教 科 書	井 原 儀	春 陽 堂	×	
02. 2	新 選 日 本 地 理 綱 要	石 川 弘三 海 林 寺 勝	田 沼 書 店	×	
02. 2	最 新 本 邦 地 理 教 科 書	最 新 本 邦 地 理 教 科 書 会 編	六 盟 館	×	全2冊
02. 3	日 本 地 理 問 答	修 文 館 編	修 文 館（大阪）	×	
02. 3	最 新 地 理	荻 野 仲 三 郎 加 藤 庄 三 郎	水 野 書 店 集 成 社 書 店	×	
02. 4	新 撰 日 本 地 理	矢 津 昌 永	丸 善	○	
02. 5	日 本 地 理 < 第 三 版 >	石 川 弘三 海 林 寺 勝	田 沼 書 店	○	初版＝02. 2
02. 7	地 理 学 小 品	矢 津 昌 永	民 友 社	○	第二版＝02. 9
02. 7	日 本 海 各 港 繁 昌 記 *	桑 原 武 一郎	私 家 版	○	副題「日露交遊指針」
02. 8	本邦地理講義<増訂三版>	喜 田 貞 吉	歴史及地理講習会	×	
02. 9	日 本 地 理 精 説	小 田 内 通 敏 吉 田 頼 吉	弘 文 館	○	
02.10	最 近 女 子 地 理 教 科 書（日本之部）	山 上 万次郎	大 日 本 図 書	○	全4冊の内
02.10	言 文 一 致 日 本 地 理	富 山 房 編	富 山 房	×	普通学全書第1編
02.11	中 等 地 理 教 科 書	滝 本 鎧 三	普 及 会	×	全2冊の内
02.11	中等新地理教科書（本邦之部）	地理教授研究会編	弘 文 館	×	
02.11	地 理 教 本（日本編）	滝 本 鎧 三 横 山 栄 次	普 及 社	×	全3冊の内
02.11	日 本 中 地 理 学	松 島 剛	水 野 書 店	○	全2冊
02.12	中 学 日 本 新 地 理	井 原 儀	林 篠 平 次 郎 崎 純 吉	○	
02.12	中学新地理（本邦地誌）	野 口 保 興	日黒書店・成美堂	×	全2冊の内
03. 2	地 理 教 科 書（巻 -- ）	脇 本 鉄 五 郎	金 港 堂	×	全6冊の内
03. 2	最 新 日 本 地 理 教 科 書	池 田 鹿之助 編	内 田 老 鶴 圃	○	
03. 3	訂 正 普 通 新 地 理（日本誌）	高 橋 兼 吉 加 藤 龍 次 郎 編	大 倉 書 店	×	訂正第二版＝00. 2
03. 3	地 理 教 科 書 備 考（第1巻）	山 上 万次郎	大 日 本 図 書	○	全4冊の内 （続巻～06まで）
03. 4	中 等 地 理（日本之部）	志 賀 重 昂	富 山 房	○	
03. 4	日本風景地誌<改訂版> *	谷 口 政 徳	松 栄 堂	×	
03. 7	日 本 海 周 遊 記 *	菊 地 清	春 陽 堂	○	
03. 9	日 本 地 理 問 答	育 文 館 編 輯 所 編	育 文 館 編 輯 所	○	最新問答全書第2編

刊行年月	書名	編著者	発売元	裏	備考
1899. 3	中等新選地理（日本之部）	山 上 万 次 郎	富 山 房	×	全3冊の内
99. 3	中 地 理 学 （ 日 本 誌 ）	矢 津 昌 永	丸 善	○	全2冊の内
99. 3	日 本 地 理	喜 田 貞 吉 幸 田 成 友	金 港 堂	×	
99. 3	新 式 日 本 地 理	池 田 鹿 之 助	内 田 老 鶴 圃	×	増訂第三版=99.12
99. 9	中等地理教科書（本邦之部）	早 見 純 一 編		×	全4冊の内
99. 9	女子 本 邦 地 誌 教育	野 口 保 興	目黒書店・成美堂	×	
1900. 1	中等 普通地理教科書（本邦之部） 教育	野 口 保 興	目黒書店・成美堂	×	初版=99.3
00. 2	日 本 中 地 理	喜 田 貞 吉	金 港 堂	×	
00. 2	普 通 新 地 理 （ 日 本 誌 ）	高 橋 兼 吉 編 加 藤 龍 次 郎	大 倉 書 店	×	
00. 4	日 本 地 理 問 答	河 村 北 溟	中 央 出 版 組 合	×	最近問答全書の内
00. 5	日 本 地 理 五 百 題	岡 野 竹 堂 （ 英 太 郎 ）	小 川 尚 美 堂	×	
00. 5	日 本 地 理 書	島 崎 恒 五 郎	開 発 社	×	
00. 6	通 俗 日 本 地 理	大 和 田 建 樹	博 文 館	×	
00. 7	日 本 地 誌	三 宅 由 太 郎	富 山 房	×	女学校用
00. 9	修正 内 国 地 誌 < 第 二 版 >	新 保 磐 次	金 港 堂	×	初版=98.3『新体内国地誌』
00.10	中 等 小 地 理 （ 本 邦 之 部 ）	文学社編輯所編	文 学 社	×	全2冊の内
00.10	普通 日 本 中 地 理 教育	天 野 馨	弘 文 館	×	
00.12	日 本 地 理 教 科 書	荒 泰 治	六 盟 館	×	
00.12	中等 帝 国 大 地 誌 教育	野 口 保 興	目黒書店・成美堂	△	
01. 1	中学 本 邦 地 理 教 科 書	佐 藤 伝 蔵	六 盟 館	○	
01. 1	日 本 地 誌 講 義	帝国通信講習会編	帝国通信講習会	×	普通学全書第4巻
01. 2	訂 正 新選地理(日本之部)<第十二版>	山 上 万 次 郎	富 山 房	×	全3冊の内、中等教育地理科教育用
01. 2	地 理 学	志 賀 重 昂	東 京 専 門 学 校	×	01.3 =製本印
01. 2	日 本 地 理 教 科 書 （ 女 子 ）	荒 泰 治 編	明 治 書 院	×	高等女学校用
01. 4	日 本 政 治 地 理	矢 津 昌 永	丸 善	×	
01.8～10	地理学講義（第一、二巻）	山 上 万 次 郎	宝 永 館 書 店	×	
01.11	内 国 地 理 小 誌	新 保 磐 次	金 港 堂	×	
01.11	新選 帝 国 地 理 問 答	普通学研究会編	長 島 文 昌 堂	○	問答叢書の内
01.12	問 答 体 日 本 地 理	中等教育研究会編	秀 英 舎	×	
02. 1	中 等 新 地 理 （ 日 本 之 部 ）	小 野 正 美	六 盟 館	×	全2冊の内、修正再版=02.4
02. 1	新選 日 本 地 理 問 答	上 村 左 川	博 文 館	○	

刊行年月	書名	編著者	発売元	裏	備考
1895. 3	中学日本地誌	矢津昌永	丸善	○	95.4 = 増補第三版
95.12	尋常中学日本地理	木村道繁四郎直	敬業社	×	
95.12	新地理学（日本之部）	松島剛	春陽堂	×	全2冊の内
96. 2	中学地理教科書（本邦之部）	野口保興	成美堂・日黒書店	△	全2冊の内
96. 2	日本地誌	秋山四郎	共益商社	×	
96. 4	新選普通地理（日本之部）	山上万次郎	富山房	×	全4冊の内
96. 5	新編日本地理問答	岡田章平	此村藜光堂（大阪）	×	
96.10	日本小地理＜訂正増補版＞	香月一秀原著 松本謙堂校訂	積善館（大阪）	×	初版=92.1
96.10	日本地理新問答	岡村増太郎	吉岡本店（大阪）	×	
96.10	中等中地理（日本誌）	中村五六編 頓野広太郎補	文学社	○	全2冊の内
96.11	大日本帝国小地理＜増補版＞	岡野英太郎	三盛館	×	
96.12	中学教程日本地理	棚橋一郎校	中学学科教授法会 中研	×	和装本
97. 1	中学日本地誌＜訂正再版＞	三宅米吉校	金港堂	×	初版=95.11
97. 1	日本新地誌	大森千蔵	松栄堂	×	
97. 1	地理学	志賀重昂	東京専門学校	×	97.1 = 製本印
97. 2	地人論*	内村鑑三	警醒社	×	94.5『地理学考』の再版
97. 3	中等教育地理学教科書（上巻）	佐藤伝蔵	博文館	×	全4冊の内、上巻=日本の部
97. 3	帝国地理教科書	三省堂編	三省堂	×	
97. 3	地学指数日本地理	小川琢治	内田芳衛門	×	全2冊
97. 3	日本地理	寺崎留吉編 川村良四郎	敬業社	×	
97. 9	中等新地理摘要	太田保一郎	八尾書店	×	
97.11	日本地理	藤井宣正	貝葉書院（京都）	×	
98. 1	日本帝国形成総覧	小野藤太編 （ほか二人）	霞江堂	×	
98. 2	地学教程日本地理	喜田貞吉校	中学学科教授法会 中研	×	全2冊、和装本
98. 2	改訂帝国地理教科書	三省堂編	三省堂	△	三訂版=99.3
98. 2	中外地理学（内国之部）	松島剛	春陽堂	×	全4冊の内
98. 3	日本新地理	佐藤伝蔵	博文館	○	帝国百科全書第2編
98. 3	新体内国地誌	新保磐次	金港堂	×	付図共全2冊
98. 4	新編中学地理（日本誌）	角田政治編 矢津昌永監修	集英堂	○	全4冊の内
99. 1	内外地理学講義	志賀重昂（述）	谷島書店（浜松）	×	西遠教育会筆記
99. 1	日本風景地誌*	谷口流螢	上田屋書店	×	

明治期刊行地理書の検索一覧表

(凡例) 「裏」欄の記号：○＝「裏日本」あり、×＝「裏日本」なし、△＝「裏面」あり。

書名の右肩に付した*印は教科書ではないものを意味する。

「裏日本」観念の成立(阿部)

刊行年月	書名	編著者	発売元	裏	備考
1887. 5	日本地理堤綱	佐久間 剛 蔵	光 風 社	×	全2冊、和装本
89. 7	日本地理	前 橋 孝 義	富 山 房	×	天野為之校閲
89. 8	地理学講義	志 賀 重 昂	敬 業 社	×	
90. 6	中等大日本地誌	秦 政 治 郎	博 文 館	×	
90.12	教科摘要新体日本地誌	林 善 助	大 倉 書 店	×	
91. 3	日本支那万国地理問答一千題<第二版>	駒 崎 林 三	顛 才 新 誌 社	×	「受験必用」の肩書きあり
91.4～ 5	中等地理(日本誌一、二)	中 村 五 六 編	文 学 社	×	全4冊の内
91.4～10	中等日本地理教科書	富士谷 孝 雄	河 出 静 一 郎	×	全2冊
91. 5	校正新撰中地理書(上巻)	山 田 行 元 原案 春 日 秀 朗 校閲	後 藤 安 次	×	79.3 版權免許の原書を大幅改訂
91. 9	日本地理<第九版>	前 橋 孝 義	富 山 房	×	天野為之校閲
91. 9	近世地理学(日本之部)	松 島 剛	春 陽 堂	△	
92. 3	大日本地理要誌	横 山 利 喜 太	孤 立 堂 (岡 山)	×	
92. 4	日本政治地理	河 野 通 章	文 栄 堂 (大 阪)	×	
92. 9	地理学講義<第五版>	志 賀 重 昂	敬 業 社	×	
93. 2	撮新日本地理	中 利 道	顛 才 新 誌 社	×	
93. 4	新選日本地理	山 浜 上 田 万 次 郎 俊 三 郎	富 山 房	△	再版=93.6
93. 6	日本地理新書<第五版>	富 山 房	富 山 房	×	初版=92.8 普通哲学全書第13篇
93. 7	日本帝国政治地理	矢 津 昌 永	丸 善 商 社	×	
93. 7	地理摘要	佐 野 喜 代 吉 編	三 有 社 (大 阪)	×	
93. 8	家庭教育日本地理談*	元 木 貞 雄	榊 原 友 吉	×	
93. 9	大日本帝国小地理	岡 野 英 太 郎	三 盛 館	×	教育全書の内
93.10	新体地理全誌	永 田 健 助	丸 善	×	全2冊、日本は上巻の一部
94. 5	日本地理	石 川 松 二 児 島 金 七 郎	私 家 版 (姫 路)	×	和装本
94. 5	新編地理	佐 野 川 泰 彦	博 文 館	×	市販学校中学校学科全書第2編
94. 5	地理学考	内 村 鑑 三	警 醒 社	×	
94. 5	中等地理教科書(上巻)	菊 地 熊 太 郎	金 港 堂	×	全2冊
94. 6	地理学講義<第六版>	志 賀 重 昂	政 教 社	×	
94.10	中等新地理	太 田 保 一 郎	八 尾 書 店	×	
94.10	日本風景論*	志 賀 重 昂	政 教 社	×	

移や社会資本の有様からして、北陸地方をはじめとする日本海側地域の太平洋側地域に対する格差の顕在化はもつと早いのではないか（千葉氏の場合、北陸四県と東海三県を比較しているが、この方法自体に問題がないか）、また「裏日本」「表日本」という表現のなかに格差観念は自ずから含まれているのではないか、という疑問が頭をもたげる。千葉氏は前引の個所で、「裏日本」という言葉が、いつ、誰により使われ始めたか、その場合の「裏」の意味内容は何かについてはまだ審かにしていない、と断っているが、私は、まさにこの点の究明が必要であると考ええる。そこで本稿では、「裏日本」という言葉がいつ頃、どのような意味内容をもって使われるようになったのかという問題を検討してみたい。

私はこの問題について、かつて当時の雑誌を検索し、一九〇三年四月一〇日刊行の『^{実業}世界太平洋』第一巻第四号に載っている長風万里「裏日本と海運」、一九〇四年一月一日刊行の『太陽』第一〇巻第一号にある矢津昌永「雪之日本」の二点を、山崎・佐藤前掲書より早い「裏日本」の語を使った事例として紹介したことがある。今回は、主として、明治中・後期に刊行された中等教育用の日本地理の教科書類を広く検討することを通じ考察することにした。

中等教育用の教科書類を取り上げるのは、つぎの三つの理由による。第一に、もし「裏日本」という語が使われているとしたなら、教科書類の性格からして、何らかの説明（概念規定）があると考えられる。これに対して教科書類以外の著作では説明なしに使われる場合が多いと思われる。第二に、教科書類は版を重ねたり、改訂版を出したりしながら、同一の著者・編者がかなり長い期間にわたり編むことが多く、そうした同一の著者・編者がある時期まで「裏日本」の語を使わず、ある時期から使い出したとしたら、「裏日本」の語が一般化する時期がほぼ確定できる可能性がある。第三に、教科書で「裏日本」の語が

使われるようになれば、「裏日本」観念の普及をいっそう促進し、その一般的成立の画期となりうる。また、なぜ中等教育用かということであるが、初等教育段階の教科書の記述は簡短であるため検討の対象にはなりえず、さりとて高等教育用の教科書は未整備の段階であり、これに対して中等教育に使用される教科書は、二〇〇ないし四〇〇頁を越える量を持ち、一般教養書としての水準にあるものがほとんどであるからである。

こうして中等教育用の教科書類を検討対象とするが、一方では教科書であるがゆえの限界もつきまとう。その限界を知るには教科書以外の地理書と比較することもまた必要である。そこで、中等教育用の教科書類を検討対象としつつも、教科書以外の若干の地理書も検討対象に上せ、比較してみたいと思う。

一 地理書における「裏日本」使用の一般化の時期

まず、私が今日までに検索しえた明治中期から後期にかけての中等教育用教科書類を中心とした地理書を刊行年月順に表示しよう。文献はすべて国立国会図書館・早稲田大学図書館の所蔵にかかる。表掲のものは当該期の地理書すべてではないが、とりわけ一八八七（明治二〇）年から日露戦争前の一九〇三（明治三六）年の間における中等教育用教科書の主要なものはほぼ網羅しえていると思う。なお教科書以外の地理書には書名の右肩に＊を付してある。

一つの結論的事実から入る。この表でみる限り、「裏日本」の語が最初に登場する教科書は一八九五年三月初版刊行の矢津昌永著『^中日本地誌』である。以降一九〇二年初めまでの間に、同年一月刊の村五六編・頓野広太郎補『中等中地理（日本誌）』、九八年三月刊の佐藤伝蔵著『日本新地理』、同年四月刊の角田政治編・矢津昌永監修

「裏日本」観念の成立

阿部 恒久

はじめに

「裏日本」という言葉がある。現在は差別用語とみなされ、公的には使用されない。だが経済的社会的に後れた日本海側の地域を意味するものとして、いまだに人びとの意識をとらえ、日本海側の地域は地勢・気候上の制約から太平洋側に比して発展が後れるのは仕方のないことだという一種の宿命観がその地域の人々を被っている。しかし日本海側地域の「裏日本」化は明治期における日本近代化の所産であり、人為なのである。「裏日本」という言葉自体、そのなかで登場したものであった。

一九七〇年代以降の日本近代史研究の特徴の一つは、日本の近代化と地域との関わりの究明に力が注がれていることにあるが、日本海側地域の「裏日本」化¹⁾「裏日本」の形成を歴史実証的に解明することは重要な課題であろう。そのとき、「裏日本」という言葉がいつ頃、どのような意味内容をもって使われるようになったのかを明らかにすることは、重要な課題である。「裏日本」という言葉が一般に使われるということは、そうした実態が生成され、人々に広く意識されるようになったことを意味しているからである。

一九一五（大正四）年一月、久米邦武著『裏日本』（新日本社）が刊行された。それは大正前期、「裏日本」という言葉がすでに一般化していたことを示している。歴史地理学者の千葉卓爾氏は、一九〇六（明治三九）年九月、博文館刊行の山崎直方・佐藤伝蔵著『大日本

地誌』第五巻が北陸地方を「裏日本の沿岸」地方と「規定」していることを引き、「明治三十年代には、もう、この言葉がかなり一般的に使用されていた」という。¹⁾たしかに同書は、冒頭の「総論」において、「本巻の収むる所、北陸の地は本州島の中部より東北に亘り、裏日本の海岸に延亘せる一帯の地方と、其近海の島嶼とを併せ……」と述べ、以下の個所でも「表日本」「裏日本」の語をしばしば使っている。²⁾

しかし千葉卓爾氏は、同書における「裏日本」という言葉の使われた、意味内容に関し、「すくなくとも、この名称はもとは地域の自然的な性質を考えてのもので、いまの用例のように、表日本の『太平洋ベルト地帯』などと対比しての、経済的におくられた、みじめな生活をおくらねばならぬ地域といったイメージは、まったくふくまれていませんでした」と述べるとともに、一九〇三年段階ではほぼ同じ面積・人口をようする北陸地方（新潟・富山・石川・福井）と東海地方（静岡・愛知・岐阜）の工業生産額について一九〇三年、一三年、二二年、三一年を比較し、日本の産業革命が始まって間もない頃の〇三年段階では、両地方の人口および工業生産額の合計数値は「ほとんど同じ状態を示し」ていた、「両地域の経済的差異の形成は、明治時代の後半から大正の末年までの、日本産業革命の進行期にあった」と指摘している。³⁾

千葉氏によれば、「裏日本」という言葉は「明治三十年代」に一般的に使われるようになったが、少なくとも日露戦前までは政治的・経済的・社会的格差をほとんど意味せず、また経済的・社会的格差自体も少なくとも日露戦後から大正期において形成されたことになる。「裏日本」の形成に関する理解は、これまで基本的に千葉氏のこのような研究に基づいて行われており、最新の日本地誌研究所編『地理学辞典（改訂版）』でも参考すべき論文としてあげられている。⁴⁾

だが、果たしてそうであろうか。別途検討を予定している人口の推